

ロバート・ルイス・スティーヴンソンの *Songs of Travel* における「記憶」の装置

佐 美 真 理

はじめに

ロバート・ルイス・スティーヴンソン (Robert Louis Stevenson, 1850-94) は『宝島』 (*Treasure Island*, 1883) と『ジークル博士とハイド氏』 (*Strange Case of Dr Jekyll and Mr Hyde*, 1886) の出版により一躍文壇の寵児となり、英国の世紀末文学の潮流を築いた作家の一人である。後期ヴィクトリア朝に発展した大衆雑誌の影響により、英国のみならず国際的な有名人 (personality) としてもはやされたが、本人は常に世界各国を旅していたため「英国文壇における不在の磁石」とでもいうべき存在であった (Luckhurst vii)。現在では主に小説家およびエッセイストとして知られているスティーヴンソンであるが、当時は詩人としても活躍していた。しかし、現在の英文学研究において詩人スティーヴンソンの一面を検討する例は稀である。その理由は、彼の詩のどこか古風な言葉遣いとそれに合わせた独特なシンタックス、律儀なリズムや音の反復などが、時に一昔前のロマン主義への回帰にも映り、20世紀初頭のモダニズム文学の先駆けとなる典型例とは考えられにくいからである。

しかし、スティーヴンソンは芸術的スタイルの実験者であった。児童文学、幻想・ゴシック小説、旅行記、戯曲、詩など様々なジャンルにおいて創作を試み、また他方では歌や音楽を創作するなど音楽家としての活動まで行っていた。後世の批評家はスティーヴンソンを「最後のヴィクトリア朝作家」とも「最初のモダニスト作家」とも呼ぶ (Luckhurst viii)。もっとも、この多岐のジャンルに及ぶ創作活動がかえってスティーヴンソンの作家としての位置づけを不安定にさせてきた歴史がある。スティーヴンソンが亡くなったのは1894年であるが、1920年代にはすでに二流作家として扱われていた (Ambrosini and Dury xv)。モダニズム文学の時代が到来する前から少しずつ high literature と、大衆や市場向きの low literature の二分化が固定され、そして「一度新しい high literature のキャンオンが確立すると、そこに受け入れられようとする作家たちがスティーヴンソンを利用し、もうそのときには完全に時代遅れであったこの romantic stylist と自分たちとではいかに違うかを読者に示し始めた」 (Ambrosini and Dury xvii)。実際にはスティーヴンソンは romantic stylist としてだけでなく、様々なスタイルを試みた stylist であった。しかし、20世紀初頭の批評は彼を

1つのジャンル、特に「ロマンス」の作家として固定しようとしたことが窺える。

現在でもスティーヴンソンはまずは「冒険小説」の作家であり、「ロマンス」の復興に努めた作家として評価される。「ロマンス」の復興は、ヴィクトリア朝に盛期を迎えたりアリズムからの逸脱・逃避と捉えられがちであり、そのため上述のように「最後のヴィクトリア朝作家」とも、あるいは「最初のモダニスト作家」とも見なされ、つまりどちらの主流にも属することができないマイナーな作家として文学史上にある。詩人スティーヴンソンの評価となればさらにマイナーなものとなる。散文作品に比べれば格段に少ない詩人スティーヴンソンへの批評をかいつまむと、世紀末詩人の一人として唯美主義やフランス象徴主義の影響を指摘されることが多く、たとえば初期の詩に見られる都会の退廃を歌うデカダンス風の詩を、『ジーキル博士とハイド氏』におけるロンドンの描写に繋げる議論がある (Fielding 104)。一方で、デカダンスとは反対に、ウォルター・ペイター (Walter Pater, 1839-94) が志向した音楽と詩の関係性を意識した詩人として評価する (Lewis 15) 傾向もある。

本論考はスティーヴンソンの晩年の詩集である *Songs of Travel* を取りあげて議論する。ロジャー・ルイスによると、この詩集は雄弁な poetic diction (詩語) を避けており、時に散文的で抒情的な態度が次世代の詩人に影響を与えたとされる (Lewis 4)。この抒情性は一読すると一世代前のロマン主義的な要素の1つと受け止められる可能性があるが、一方では世紀末や後の時代に繋がる近代的な要素も多分に含むと考えられる。また、この詩集は、作曲家レイフ・ヴォーン＝ウィリアムズ (Ralph Vaughan Williams, 1872-1958) が同名の歌曲集を作曲したことでも有名である。そのため、スティーヴンソンの故郷に対する牧歌的なノスタルジーや感傷を表している詩集と捉えられがちであるが、実際にはどのような「記憶」が表現されているのか、またどのような点で本詩集にはスティーヴンソンならではの独自性や近代的要素があると言えるのか、いくつかの詩を分析しながら吟味してみたい。

1. *Songs of Travel* について

1-1. *Songs of Travel* 出版の経緯

1883年に『宝島』の単行本、1886年に『ジーキル博士とハイド氏』を出版しベストセラー作家の仲間入りをしたスティーヴンソンは、幼少の頃から患っていた気管支疾患の影響により、その当時さらに体調を悪化させていた。若い頃から国内外を移動し療養に努めていたが、1888年ついに南太平洋に渡ることを決意する。*Songs of Travel* はその少し前から書き留めていたとされる詩を集めたものであるが、スティーヴンソンは1894年にサモアで死去する。そのため詩集はその1年後に刊行された全著作集第14巻 (エディンバラ版)¹において初めて公開される形となった。翌年には Chatto & Windus 社より *Songs of Travel and Other Verses* として単独の形でも出版されている。

ステイーヴンソンは小説家やエッセイストとしてのみならず詩人として認められることを強く望んでいた。1885年に出版した子ども向けの詩集 *A Child's Garden of Verses* (『子どもの詩の園』) の反響が良かったことを受け、続けて1887年には詩集 *Underwoods* を出版し、さらに南太平洋に渡った後も本国から携えてきた詩の原稿を整理しつつ、*Ballads and Verses* というタイトルでバラッドと抒情詩を組み合わせた詩集を出版することを企画していた。しかし、その計画は完全な形では実らず、1890年に *Ballads* というタイトルでバラッド集として出版された。ステイーヴンソンはそのときに世に出なかった verses を含む *Underwoods* 続編の出版を企図し、本国の編集者に原稿を送り計画を進め、自分が死んだ後も必ず実現させるように周囲に指示を出していた²。その結果が *Songs of Travel* であり、最終的にはステイーヴンソンが求めた *Underwoods* 続編という形ではなかったものの、彼の長年の希望が一つ叶えられた形で世に出された。Chatto & Windus 出版の同詩集に記された編集者シドニー・コルヴィン (Sidney Colvin, 1845-1927) の巻頭言によれば、*Songs of Travel* はステイーヴンソンが英国を離れることを決めたその前後から様々な場所や時々にかけて書かれてきた詩を集めたものであり、また各詩が掲載される順番や詩集のタイトルについても本人が試行錯誤を重ねていたが、最終的にはそのすべてが編集者に委ねられた³。本誌集は英国やアメリカで創作されたと考えられる抒情詩のほか、後半はもっぱらタヒチやサモアなど南太平洋の地で書き綴った詩でまとめられ、その中にはバラッド詩も含まれている。

1-2. *Songs of Travel* 構成について

2003年編纂のエディンバラ版(1895年刊行の全集エディンバラ版に基づく)によると、*Songs of Travel* は全46篇の詩で構成される⁴。全ての詩にローマ数字が添えられ、またそのうち半数程度にタイトルが付される。「断片」と記されるタイトルなど、未完と思しき詩も掲載されている。その一方で詩の背景に関してステイーヴンソンによる詳細な説明が付されている場合もある。

詩集のおおよそ半分を過ぎたところから、各詩編の最後にその詩が作られた場所や地名、あるいは年号と日付が書かれるようになる。初めて登場するのは第18番の詩で 'Saranac Lake' とあり、ステイーヴンソンが南太平洋を航海する前に訪れたアメリカのニューヨーク州の地名が認められる。次に登場するのは第28番の詩で 'Apemama' (現 Abemama、アベママ) とあり、これ以降ほとんどの詩に南太平洋の島々の名前(タヒチ、ホノルル、マラカイ、ヴァイリマ)が付される。実際ステイーヴンソンはこの順番でそれぞれの地域を巡っており、最終的にはサモアのヴァイリマに地所を購入して定住した⁵。また、帆船 'Equator' の名も登場し、途上の船の上で書かれた詩もある。

従って、本詩集における詩の配列はある程度それぞれの詩が作られた時系列に沿っていると理解される。しかし、こうしたクロノロジカルな配列と対照的に、詩の内容は伝統的類型

に属するものから、スティーヴンソンが現実に体験した出来事やその時の心情を歌ったものなど多岐に渡る。特に詩集の前半部は、放浪の旅人の心境を歌ったもの、若き恋人との関係（別れと出会い）を歌ったもの、ミューズや詩の力を讃えたもの、過ぎ去る年月や懐かしき故郷を振り返って歌うものなど、いわゆる「旅の歌」というタイトルにふさわしく、そのジャンルの類型やロマン派の伝統を想起させる詩が多い。一方、後半部はそうした伝統から離れ、スティーヴンソンにとって異国である現地の人物たちや風景を前にして歌った詩が多い。ついに到着した‘Fairyland’（＝タヒチ）の美しさと自身の希望を歌ったもの、熱帯の気候や自然風景を歌ったもの、ハワイ王朝最後の王女カイウラニと会った際に王女に向けて歌ったもの、アベママの首長の物語をバラッド風に語ったものなどがある。さらに、妻の人となりやを軽妙に歌ったもの、また故郷スコットランドもしくは‘home’への想いを秘めた詩が総じて増えていくのも特徴的である。つまり、詩の配列はスティーヴンソンの実際の「旅」の順路と直線的な時間軸に沿って構成され、終の棲家であるヴァイリマの歌で終わるのだが、その「旅の歌」の内容は、伝統的な慣習とイメージに倣った詩もあれば、欧米の文化とは全く異なる未知の経験に触発された新しいイメージで創作された詩もあり、一つの詩集の中で変容を見せている。

Songs of Travel はこれに代表される「直線」と「変容」のイメージが不可思議に混ざり合った詩集である。詩集冒頭に特徴的である「一本道」を象徴とした、若者の探求と希望から始まる「人生」の歌であると同時に、それはまた、転地療養という名目で大陸と海洋をひたすらさまよいつづけたスティーヴンソン晩年の「放浪」の歌でもあると言えるのである。上述したように、*Songs of Travel* が刊行されるまでには親友でもあったコルヴィンの編集方針が深く関与していた。コルヴィンは詩集のタイトルや詩の配列を決定した以外に、各詩について「削除、変更、追加」を施したとされている（Lewis 478）。しかしながら、断片的な詩やごく短いシンプルな詩も多く残されていることから、消耗が激しく体力の衰えた晩年のスティーヴンソンの生々しい表現がそのまま提示されているという見方もできるだろう。

また、本詩集にスティーヴンソンの体調が大きく関わっていることは否めない。スティーヴンソンが南太平洋に渡ったときから、故郷の地をもう一度踏めるかどうかは疑わしい状況であり、実際二度と英国に戻ることはできなかった。「ここは天国」（辻原 817）と喜びと期待に満ちた南太平洋の地にあっても、スティーヴンソンの体調は全般的に優れず、死に対する意識や病による精神的作用が創作活動に一定の影響を与えたと考えられる。現地でかかった風邪やインフルエンザによる病状悪化、咯血、書癪などに苦しみ、最後の2年間の執筆活動の多くは口述筆記というかたちで行われたとされる（辻原 818）。

様々なスタイルを含む *Songs of Travel* であるが、次節以降では冒頭から3つの詩を取り上げ、次に詩集の前半部からいくつかの詩を取り上げて議論する。後半の南太平洋を舞台とする詩は上述のように性質が大きく変わるため、本稿では前半に集中して議論する。

2. *Songs of Travel* 冒頭の3つの詩：「さすらい人」と「若者と恋」

2-1. 一本道のイメージ

Songs of Travel の第1番目の詩 ‘The Vagabond (To an air of Schubert)’、続く第2の詩 ‘Youth and Love - I’ と第3の詩 ‘Youth and Love - II’ では、詩人の旅の開始とともに若者の心意気、野心、成長が歌われる。この詩集冒頭の3つの詩に特徴的なイメージは旅人の頭上に広がる空、見渡す限りの大地、目の前の一本道であり、そのほかの具体的な自然描写はほぼ欠如している。たとえば、「さすらい人」というタイトルが付いた第1の詩は以下のように始まる。

Give to me the life I love,	わたしに好きな生き方を与えてくれ
Let the lave go by me,	それ以外は何もいらぬ
Give the jolly heaven above	頭上には明るい空を
And the byway nigh me.	傍らには道を与えてくれ
Bed in the bush with stars to see,	寝床は星々が見える茂みのなか
Bread I dip in the river -	パンを川に浸して食べる
There's the life for a man like me,	わたしのような者にふさわしい生き方
There's the life for ever.	いつまでも続く生がここにある
Let the blow fall soon or late,	いつ災いが起きてもかまわない
Let what will be o'er me;	何が起ころうとかかってこい
Give the face of earth around	あたり一面に広がる大地と
And the road before me.	目の前に続く道さえあれば
Wealth I seek not, hope nor love,	富は求めない、愛も期待しない
Nor a friend to know me;	連れの友もいらぬ
All I seek, the heaven above	ただ私が求めるものは頭上の空
And the road below me.	足下に伸びる道

(1-16)

あらゆるしがらみから解放され、まっすぐに生きたい詩人の生と旅への想いが伝わってくる。この至ってシンプルな描写からは若さ、元気、希望も想起される。旅人は恐れを知らない若者のように富も友情もすべていらぬと宣言する。自然の細かな事物や風景には触れず、自然の生き物への関心もないようで、生きるために必要最小限のものだけを傍に旅をすること

だけが目的のようである。歳月を重ね日々の憂いがつりの、無垢な自然界へと現実逃避しようとする詩人の姿とは異なると言えるだろう。この大胆とも無謀ともいえる気概は、韻律の観点では各行の語頭にストレスが置かれることで強調されている。詩全体は iamb (弱強格) の安定したリズムで構成されているが、inversion (転置) によって 'Give' や 'Let' など各行の語頭にもストレスが置かれ、それぞれの言葉の意味が引き立ち詩人の内面が強調されている。また、tetrameter (四歩格) と trimeter (三歩格) が一行ごとに交互に表れることから、iamb の軽快で前進性のあるリズムが2行ごとに繰り返される形になり、旅人の物理的前進と内面の抒情性がメロディアスに表現される。この四歩格と三歩格の交互と abab の押韻はいわゆる common meter としてバラッド調でもあり、聞き手に強く訴えかけ、その意味でもまっすぐな想いが伝わってくる。

さらにここで注目したいのは空間のイメージである。旅人を中心にその四方に空と大地が広がり、足下には道が伸びる。外界にいるが、現実の地理や自然よりも空間が強調されている。この空間は「若者と恋」と題された第2、第3の詩にも認められる。第2の詩において、詩人とその恋人は庭の門のところであつた一度だけ口づけを交わして別れるが、詩人は 'I must fulfil an empty fate / And travel the uncharted' (3-4) (「わたしはこの先の空っぽの運命を埋め / 地図なき領域を旅しなくてはならない」) と宣言し、これからの住処は 'The untented Kosmos' (9) (「天幕なき宇宙⁶」) であり、恋人は危険を潜めた輝く目を持つ 'open road' (11) であると述べる。また、'I fling my soul and body down / For God to plough them under' (「身も魂も投げだそう / 神がそれらを耕せるように」(15-16行)) と歌い、大地と自身の身体を同化させる。

次の第3の詩は 'To the heart of youth the world is a highwyside' (1) (「若者の心に世間は街道の傍らにある」) という一行で始まり、旅人にとって恋の誘惑や恋人との出会いが本筋ではないこと、ただ傍らを通り過ぎていく様が歌われる。「恋」を象徴する世俗的な金色のパビリオンが第1連において印象的に言及されるものの、それは 'hide' (3) や 'nestle' (4) (「木立の中に隠れるように存在する」の意) とあるように、あくまでも果樹園の奥に潜む目立たない存在としてある。この詩では冒頭の一行が提示するように、若者の 'heart' という中心軸がまずあり、それを貫くのは 'highway' でありまっすぐな一本道である。世間や世の中は 'wayside' にしかなく、それを強調するように旅人の「両側 (on either hand (2))」に連なる果樹園と「はるか遠くまで広がる平らな地 (far on the level land (4)) が空間的に示され、具体は描写されない。そして第2連では旅人が「恋」を振り切り、軽快に歌いながらその highway を旅し続ける様が示され、第1連の2行目 'Passing for ever, he fares' (「彼はいつまでも通りすぎ、旅し続ける」) の句が再現され、繰り返されることになる。このように未開の領域や一本道が旅の空間としてあると同時に、それが自分自身そのものであることも示されている。

こうして *Songs of Travel* は若者による人生の旅の歌で始まる。第2の詩も第3の詩も

iambic の脚を保持し、広大な自然の中を歩み続ける若者が描写され、かついずれの詩においても俗世間と切り離して存在する自己の世界、探求すべき余地のある「小宇宙」が自身の内にあることが示唆されている。これらの詩は現実の旅以上にアイデンティティを構築しようとする「自己」や「自我」のあり方を示していると言えるだろう。これは内面の成長や自己確立というテーマを想起させるものである。

2-2. ロマン派の伝統と「旅の歌」

自然の中を旅したいという衝動はいかにもロマン主義的である。上述の「さすらい人」において、草木を寝床に星を見ながら眠りにつきたいと思う気持ちは、自己と自然を有機的に結びつけようとするロマン派的衝動のようでもある。また、1人称による抒情詩の発展もロマン派に原点があり、たとえウィリアム・ワーズワス (William Wordsworth, 1770-1850) の *The Prelude* (『序曲』、1799, 1805, 1850) は現実の人生の旅と詩人の内面的成長をパーソナルな「叙事詩」に仕立て、叙情的要素を組み込んだ自伝的叙事詩のジャンルを確立させた。また、ワーズワスが活躍した19世紀初頭は「若者」や「若さ」が特別な意味を持った時代でもある。ゲーテのウィルヘルム・マイスターに象徴されるように、社会が変革する時期にあって若者はそれ以前の「大人」をただ反復するのではなく、前世代との連続性を断ち切るために社会空間を移動しながら自己を成長させる存在として、文学作品に登場し始めた。若い hero には「移動すること (mobility)」が必須であり、また「その過程で思いがけず希望を抱いてしまうこともあるため、以前より十全でありながら (….) 常に不満と不安を抱えて落ち着かない『内面性』が生まれるに至った」(Moretti 4) とフランコ・モレッティは述べる。ロマン主義的精神、特にワーズワスの自然と世界に対する態度とは、真実を「内面における自身の明確な意志と動機に、外面であれば人間のシンプルな行動に」(Eigner 12) 求める態度であり、そうした精神は19世紀前半の文学に大きな影響を与えた。ロマン派の詩や「教養小説」といったジャンルにおける若者を主人公とした内省と内面的成長の旅はその時代に最盛期を迎えている。

世紀末に活動したスティーヴンソンはロマン派の伝統を強く意識していたと考えられる。ロマン派の詩人の中でも、特にワーズワスやロバート・バーンズ (Robert Burns, 1759-96) を尊敬し、その創作スタイルを模倣したと言われる (Lewis 3)。また、「さすらい人」が「シューベルトの歌にのせて」と副題を付けられていることから、*Songs of Travel* の始まりを歌の伝統的スタイルで始めることも意識されている。ヴォーン＝ウィリアムズの同名の歌曲集 (*Songs of Travel*, 初演 1904 年) は本詩集から9篇の詩を選び作曲された作品であるが、「さすらい人」を第1曲目とし、本詩集の前半に収められた詩のみで全体が構成される。「若者と恋」の2つ目の詩も選ばれ、このような恋人との儂い関係や女性の美しさを歌う詩が歌曲の第2曲目から第5曲目として選ばれ、少なくとも歌曲の前半は青春を生きる若者の経験と

感情が歌われる⁷。歌曲の創作が開始された時期は詩集が出版されてから約6年後であるとされており、同時代の読者の一人としてヴォーン＝ウィリアムズが行った詩の再編成の内容からも、元々のスティーヴンソンの詩集がロマン主義的な経験や感情、特に若者の内的経験や成長の芽生えを想起させるものであったことが理解されるだろう。

「若者と恋」第2の詩の一節に‘He to his nobler fate / Fares’ (7) (「彼はより崇高な宿命に向かって / 旅をする」)とあり、旅人はこの先何らかの目標やある到達点に向かって進み、内面的成長を遂げることが期待される。また、「若者と恋」第1の詩では「私自身の闘いの『オデュッセイア』」(‘My Odyssey of battle’ (8))を描いてみせると意気込み、旅の苦難のあとに帰還を試みる旅人の姿を聴き手は思い浮かべることになるだろう。‘Vagabond’、‘Odyssey’、‘highway’といったキーワードとともにバラッド格調のスタイルも併せ、この後の展開として成長という直線的、目的論的ストーリー、あるいは放浪を経て帰還する回帰的なストーリーという19世紀前半に流行した「人生の旅」のストーリーとその歌が期待されることになるはずである。しかし、スティーヴンソンの *Songs of Travel* はそのいずれの形も踏襲しない。次節以降は、そうしたロマン派的なイメージから離れるいくつかの詩を取り上げ、特に「回想」や「記憶」という観点からスティーヴンソン独自の表現方法を探る。

3. *Songs of Travel* 前半の詩：回想と記憶

3-1. 夢と追憶

Songs of Travel は伝統的なロマン派のスタイルとイメージで始まるが、その構想は続かない。自然の中を旅する放浪の若者の姿は消え、その旅人を取り囲み、規定していた空、大地、道といった明確な空間も失われる。提示される空間は次第にぼやけ、自然描写や人物描写においても固定的なイメージは提示されず、1つの詩の中でとらえどころなく変化するようになる。たとえば‘In dreams, unhappy, I behold you stand’ (1) (「幾度となく見る不幸せな夢の中、あなたは立っている」)の一節で始まる第4の詩では、詩人が見た夢の中にかつての恋人が現れ、彼女が涙を流している様子が歌われる。年月を経てもなお詩人の眼前にある恋人の悲しみの表情にフォーカスが当たるものの、次のスタンザではそこに詩人自身が不意に影のように現れ、消える(‘He came and went.’ (9))。「私」が見る夢の中に「彼」という自身の分身のような人物が登場することで、詩人のフォーカスは「彼女」と「彼」に分散し、彼女に対する感情もふと削られる。ロマン派の詩のように自己と対象との一体化を図ろうとする強烈なパッションは持続せず、対象を捉えようとする集中的なエネルギーも弱まり、自己と対象の間に微妙な距離や乖離が生まれているようである。それでもこの詩においてはまだ生々しい恋人の姿が存在し、未練の気持ちがある若者の視点で歌われているようにも捉えられ、詩人と対象との微妙な距離はさほど顕在化していないと言えるであろう。

このような「夢」や「夢のような空想」を媒介にした追憶は第12番目の詩‘We Have Loved of Yore (To an air of Diabelli)’にも見られる。「私たちはかつて愛した（ディアベリの節にのせて）」というタイトルが付された14行連の詩は2つのスタンザで構成され、「私たち」が若い頃に川下りを楽しんだ風景が歌われる。特徴的な点はその思い出の風景が2つのスタンザでがらりと表情を変えることである。第1スタンザは次のように始まる。

Berried brake and reedy island,	ベリーの茂みとアシの生えた島
Heaven below, and only heaven above,	眼下には天、頭上にも天が広がる
Through the sky's inverted azure	逆さまに映り込む紺碧の空の中
Softly swam the boat that bore our love.	ボートが静かに泳いだ、私たちの愛を乗せて

(14)

「私たち」のボートは4月の明るい光の中を家路に向かう。続く数行では頭上の空、川の流れ、恋人の目すべてが‘bright’(5-7)という単語で繰り返し形容される。さらに頭韻を踏んだ‘glory’(9)と‘golden’(9)、脚韻を踏んだ‘shining’(10)と‘arising’(10)を重ね、一層その輝きが強調される。また、「さすらい人」の詩と同じように、2人の恋人たちを取り囲む天空と一筋の川が彼ら二人だけの空間を創り出している。そして光輝く自然世界と彼らの感情が呼応し、ロマンティックな抒情を漂わせて二人の愛が永久に続くことが期待されるのである。実際、スタンザの最後は「私たちは生き、愛した」と力強く二人の愛を宣言して終わる。

ところが、続く第2スタンザでは同じ風景が冬の情景として歌われる。そこでは霜で凍りついた川の流れは止まり、銀世界と化した地上は空を映し出すこともない。ボートの恋人たちは目を閉じ、しばらくまどろむ。そこで二人は目覚めるのだが、そのあとの二人の様子は描写されず、以下のように「夢」の視点に切り替わる。

Still, in the river of dreams	しかし、夢の中の川に
Swims the boat of love-	愛のボートが泳ぎ続ける
Hark! chimes the falling oar!	ほら、オールが落ちる音が繰り返し聞こえる

(19-21)

第1スタンザでほめかされたボートの前進性、時間の継続性はぷつぷつと途絶え、同じ情景が夢に転化されたことでもはや遠い過去の記憶となる。また、第1スタンザで光に照らされ浮かび上がっていた明確な情景も薄ぼんやりとし、オールの音のように聴覚に訴える要素が強くなる。詩人は続く数行において、冬になるたびに「夢見心地の空想 (dreaming fancy (22))」が育ち、「年老いた恋人たちの耳には川の音が聞こえ始める (‘In those ears of aged

lovers / Love's own river warbles in the reeds.' (23-24)) と述べ、「私たちはかつて生き、愛した」と宣言して終わる。

このように、第1スタンザは *Songs of Travel* 第1番の詩と同じようなロマン派的な抒情詩として機能し、若いカップルの明るい未来と持続的な愛が高らかに歌われるが、同時に第2スタンザでその構想が否定される。二人の愛そのものが否定されているわけではないが、より客観的な距離感をもって見つめ直される。また、この詩はスティーヴンソンが仕掛ける「回想」や「記憶」の装置を典型的に示した例でもある。同じ風景を「夢」や「空想」のフィルターを重ねて提示することで、現実の風景は変容した形で回想される。それが「記憶」として定着する過程を1つの詩の中で表現している。*Songs of Travel* の2つのイメージである「直線」と「変容」を1つの詩において体現した例であるとも言えるだろう。

3-2. ノスタルジーと不在

スティーヴンソンの小説、エッセイ、詩における「回想 (recollection)」のあり方を議論したアン・コリーは、スティーヴンソンは基本的に記憶を信頼していたと述べている (Colley 213)。つまり、過去は忘却されるものではなく常に回顧できるものであり、また途切れたり断片的であったり不連続なものではなく、持続するものと捉えていた (Colley 213, 215)。そして幼い頃から病に伏すことが多かったスティーヴンソンにとって、過去を思い出すことは人生の希望でもあり、たとえ病床にあっても回想によって生きながらえることができると考えていた。「回想に期待をかけることで自分を慰め」 (Colley 205)、また「過去を振り返ることは病床から起きて少しでも長生きするための報酬であったのだ」 (Colley 205) と述べる。スティーヴンソンにとって回想は前向きに生きるための術であった。

しかし、一生涯病身で、幼少期はベッドの上で空想を膨らませ、大人になってからは転地療養のため各地を放浪し続けたというこの特殊な状況と環境は、スティーヴンソンをノスタルジックな後ろ向きの人物として固定評価する大きな要因となっている。スティーヴンソンの詩はノスタルジックで、感情的で、センチメンタルな詩であると分類されてきたことが、彼が死後も詩人としての評価を得られなかった理由の一つであるとベニー・フィールディングも主張する (Fielding 112)。しかし、スティーヴンソンの生きた世紀末は、ロマン主義の時代を経て実証科学の発展や物質主義を経験したヴィクトリア朝期の最後にあたり、その時期はまたフィールディングが述べるように、「現代の私たちが想定する過去への感傷的な眼差しだけでなく、記憶の機能そのものを再度科学的な関心から捉えようとしていた」 (Fielding 110)。スティーヴンソンはただ過去を感傷的に振り返るだけではなく、「回想」や「記憶」がどのように働き、作用し、またその効果がどのようなものかということに関心を持っていた詩人であったと言える。

上述の第12番の詩で表現されているように、詩人スティーヴンソンにとって過去は直接

思い出すことのできるものではなく、そのまま回復されるものでもない。しかし、「夢」のような視覚的ヴィジョンを通して過去の風景は持続的に回想され、一つの「記憶」として定着する。コリーはスティーヴンソンが「回想」について語るときに、「万華鏡」や「ソーマトロープ」など幻想的な道具を比喩として用いることが多い点に着目している (Colley 206)。たとえばソーマトロープはいくつかの絵が描かれたカードを回転させて1つの絵が見えてくる仕掛けである⁸が、スティーヴンソンはそれと似たような形で、過去を形成する雑多なイメージも時間をかけると1つの「パターン」として立ち現れると考えていたと議論する (Colley 207)。つまり、現実の雑多なイメージが現在に移行するときに、現在の感覚や認識を混乱させるような子細を捨象した上で視覚的なヴィジョンに変容する (Colley 207)。スティーヴンソンの詩に抽象度の高いヴィジョンのような風景が多いことはこれまで他の批評家も指摘しているが、*Songs of Travel* の中でも特に「故郷」を振り返る詩に着目してみると、「夢」のフィルターがかかったヴィジョンとはまた異なる風景が提示されていることが理解される。それは、何か重要な事物や人物が過去の風景の中から決定的に欠けている、という感覚を伴うものである。以下に例を挙げる。

まず第16番目の詩は詩人が故郷スコットランドの人々や風景を懐かしむ歌である。第1スタンザでは年寄りや乙女たちの顔が思い出されている。

In the highlands, in the country places,	ハイランドには、田舎には
Where the old plain men have rosy faces,	赤ら顔の素朴な老人たち
And the young fair maidens	若く美しい乙女たち
Quiet eyes;	おとなしい目
Where essential silence cheers and blesses,	そこに清らかな静けさが歓喜し、祝福する
And for ever in the hill-recesses	そして永遠に山の奥へと流れゆく
Her more lovely music	あの彼女のさらに美しい音楽も
Broods and dies.	しばしとどまると消えゆく

(1-8)

続けて第2、第3スタンザにおいて詩人は「ああ、昔よく登ったあの山を訪れることができたなら ('O to mount again where erst I haunted' (9))、「ああ、夢を見ることができたら、そこで目覚めて歩き回れるなら」 ('O to dream, O to awake and wander / There' (17)) と故郷への思いを感情的に歌う。

第1スタンザの前半に見られる特徴はルイスが指摘する paratactic なスタイルである (Lewis 4)。この parataxis (並列) によってできるだけ接続詞を用いずに単語や句を並べて個々の事物を浮かび上がらせている。田舎の老人、若い女性、顔や目、これら個々の事物に

フォーカスを当てるが、同時にそれらを並列させることで集団としての性質も示しているようであり、人々が集う様子も想起できる。同じスタンザの後半になると今度は and の接続詞が効果的に用いられ、個々の事物よりも「流れ」が重視されている。おそらく詩人はかつて聞こえていた歓喜や祝福の音が山々を漂い続ける様を想像したのであろう。しかし、より重要なのはその場に支配的な silence であり、集えば聞こえてくるはずの声はすでに遠い過去のものとなっているようである。また、最後の一行には brood（「暗雲や沈黙などがあたりを覆う、のしかかる」の意）や die という暗い語が用いられ、より美しいはずの「彼女」の音楽については完全に失われていることがほのめかされる。

このように、人々の顔や風景を思い出すことはできても生身の声や存在を取り戻すことはできず、それがかえって故郷に戻りたいという願望に詩人を駆り立て、第2連、第3連に繋がっていると考えられる。それらは想像できるかもしれないが、最も大事な人や肝心な音楽は失われたままである。詩の最後は「より力強い動きだけが耳に届く、風と川、生と死のみ」(Only the mightier movement sounds and passes; / Only winds and rivers, / Life and death.' (22-24)) と結ばれる。詩人の想像力は故郷の風景を回想するが、その具体は失われ、かつそこにあるべき決定的な何かが失われている。詩人は故郷をただ懐かしむのではなく、記憶の中に残るものと失われるもの、記憶における「生と死」を内省している。

続く第17番目の詩も故郷を懐かしむ歌である。タイトルはないものの、'(To the Tune of Wandering Willie)'（「(流れ者ウィリーの節にのせて)」）と括弧で添えられ、古いスコットランド民謡に合わせた独特なリズムと韻律で調整された8行3連詩である。*Songs of Travel* は全体的に iambus の詩が多いが、この詩は dactyl（強弱弱格）である。この詩脚は iambus、trochee（強弱格）、anapest（弱弱強格）と合わせた4つの脚の中では使用頻度が低いとされ、anapest がスピードを強めるのに対し、dactyl は少し重苦しくなるとされる（志子田 144）。詩の始まりは 'Home no more home to me, whither must I wander? / Hunger my driver, I go where I must' (1-2)（「家はもう私の家ではない、どこへさすらえばよいか / 駆り立てられた私は向かうべき場所へと進む」）とネガティブな回顧とポジティブな前進が入り交じる印象的な一節である。何らかの理由で 'home' を失った旅人が旅を続けようとする歌であり、故郷に戻ることはできないと悟ったスティーヴンソン自身の想いや境遇を想起させる。

続けて詩人は第16番の詩と同じように、かつて集った人々の顔や話し声を回想するが、ここでは時制の違いによって過去、現在、未来の風景が提示され、前詩の paratactic とは対照的に prosaic（散文的）なスタイルをとる。過去時制で表される回想の風景は、詩人が幼かった頃に人々が家の暖炉を囲み集った様子であり、またその幸せに満ちた暖かい雰囲気や皆の歌声である（'Fire and the windows bright glittered on the moorland; / Song, tuneful song, built a palace in the wild.' (11-12)「暖炉の火と窓の明かりがムーアにきらきらと光を放ち / 美しき調べの歌が荒地に宮殿を築いた」）。一方、現在時制で表される風景はその家が今や廃

墟と化した姿である（‘Thick drives the rain, and my roof is in the dust.’ (4) 「私の家は雨に打たれ、屋根は朽ちている」）、（‘Lone stands the house, and the chimney-stone is cold.’ (14) 「家は独りきり立ち、煙突の石も冷えている」）。現在と過去を対比させ、かつてのように自分の家で親しき友が楽しく語らう機会は二度と訪れることがないことを暗示させる。特に現在時制の詩句には ‘dust’、‘cold’、‘departed’ (15) といった「死」を連想させる言葉を連ね、友も家も現在「死」の状態にあることが比喩的に示される。

ところが、最終スタンザでは助動詞 shall が繰り返し用いられ、雰囲気が一変する。‘Spring shall come, come again, calling up the moor-fowl’ (17) （「春は再び訪れる、ムーアの鳥たちをもう一度呼び戻す」）という詩句で始まり、一気に自然の世界が再起し、鳥や蜂などの生きもの、光と水がもたらされる。また、‘Fair the day shine as it shone on my childhood - / Fair shine the day on the house with open door.’ (21-22) （「幼き頃の日の光と同じ光が輝き / 扉の開け放たれた家を明るく照らすだろう」）と、家の「再生」も予期される。宗教的な「復活」や「再生」が想定される場所だが、注目すべきは最終行において ‘But I go for ever and come again no more.’ (24) （「しかし私は永遠に去り、二度と戻ることはない」）と締められ、自らはその「再生」の場面に含まれないという点である。「家」はかつてと全く同じように人々を引き寄せ、団らんと憩いの空間を作り出すだろうが、自身はそこに不在である。故郷の風景の中に決定的に自身の姿が見えないのである。

このように、旅人は一方で自分が昔過ごした家を思い出し、懐かしみながら、‘home’ という空間がもたらす再生の力を肯定的に歌う。家も人間も自然も変わりゆくが、記憶の中で同じ空間は何度も再生可能である。他方で、記憶の中の視覚的風景に常に自分はいない。再生されたヴィジョンはその現実を突きつけるものであり、回想することによって過去の風景を現在の自分に取り戻し、ヴィジョンとして記憶に定着させることができても、それはあくまでもヴィジョンであり過去の時点に戻ることはできない。従って、「回想」という行為は自身の「不在」を決定的なものとし、つまり後ろを振り返る行為は自身がまた「死」に向かって一歩前進することも予期させる。冒頭2行目の ‘I go where I must’ という一節は「死」に向かうことを暗示すると捉えることもできるだろう。この第17番の詩はスティーヴンソンがタヒチで倒れ、回復に努めているときに作られたとされる⁹。「記憶」の力を信じていたスティーヴンソンにとって、故郷の風景や情景を懐かしむことは自分の未来の時間を引き延ばすための方策でもあり、詩を通してそのヴィジョンを提示することで「記憶」の定着を図った。しかし、「回想」という行為が「生」と同時に何か決定的なものの「死」を含んでいることもまた詩を通して表現しており、南太平洋の地で自らの死を意識することがこの詩にどこか暗い側面を残したのかもしれない。

4. *Songs of Travel* 後半の詩について

最後に、主に南太平洋を舞台にした後半部の詩について簡単に触れておきたい。後半部では各詩の最後にそれが作られた場所の名前が付されるようになり、現地の人々との交流や熱帯の風景などを歌う詩が多くなる一方で、故郷を思い出そうとする詩も散見される。フィールドイングによれば、スティーヴンソンの詩は過去の土地への想いを募らせながら、もはやどこも 'home' ではないということを示しているケースがあり、つまり 'home' という言葉自体が空虚に響き「空っぽのシニフィアン」(Fielding 112)になることがあると述べる。そして *Songs of Travel* 後半の詩ではそのケースに相当する例があり、過去の風景を作り出す事物が本当はどこに属すものであるかわからなくなるなど、スティーヴンソンの対象への欲望とその対象から引き離されたいという衝動のアンビヴァレンスが高まっている (Fielding 114) と指摘している。

南太平洋と言っても、スティーヴンソンはヴァイリマに定住するまでいくつかの土地を巡り、その土地のローカルな文化に関心を持っていたため、後半の詩におけるそれぞれの土地と母国との関係性を見極めるにはさらなる検討が必要である。しかし、スティーヴンソンのように世界各地を旅した作家にとって 'home' という空間は確かに独自の意味を持っていただろう。後半の詩に土地の名前を記し始めたのは、そのいずれもがその時々スティーヴンソンの 'home' であることを示しているが、それら地名の異国の響きもまた詩の一部を成している。*Songs of Travel* における現代的要素とはまさにこの両義性にあるだろう。つまり、旅人は原点の地である故郷を懐かしみ、その風景を現在の自分に引きつけようとする衝動を抑えきれないが、その表現が示すものは対象から遠ざかろうとする距離感である。この矛盾した感覚とそれ自体を詩の構成に組み込んだ独自のスタイルは、同時代の象徴主義だけではなく後のモダニズム詩を予感させ、その意味でも *Songs of Travel* は世界各地と海洋を旅した最初の現代詩人の所産とも言うことができるだろう。

おわりに

本稿はスティーヴンソンの *Songs of Travel* の前半の詩をいくつか取り上げて分析を試みた。前半と後半を分けたのは便宜的な理由からではなく、前半はロマン派の伝統に連なる傾向があるが、後半は南太平洋のローカルな風土が主なテーマになり、構想やスタイルが変容していると捉えられるからである。冒頭は人生の旅の始まりを歌い、若者が自然の力と自身の生命力を結びつけようとする衝動が表される。その有機的な関係性を求める衝動はロマン派的であり、ここから旅の経験を経て成長を遂げていく若者の姿を予感させる。しかし、そ

のナラティブはすぐに否定され、強力な結びつきを求めていたはずの自然の事物は旅人から遠ざかり、それは多くの詩において回想の対象としてのみ提示されるようになる。

スティーヴンソンは *Songs of Travel* において確かにロマン派を意識していたが、その一世代前の伝統とは異なるスタイルをも追求していた。韻律やリズムはある程度の厳密さを維持し、それらを1つの詩の中でできるだけ一定に保ちながらも、たとえば第12番の詩のように、ロマン派的な抒情詩のスタイルとその構想を否定するスタイルを両立させるなど、詩のディクッション以上に構造と内容の関係性に意識的であったといえる。それはまた、「回想」や「記憶」がどのように作用し得るのかという問題を、いくつもの詩を通して明らかにしている点にも見てとれる。詩人は故郷を懐かしむ詩を多く提示しながら、その土地をただ感傷的に振り返るのではなく、過去と現在がどのように結びついて「記憶」となるのか、また「回想」という行為自体が何であるのか、そうした構造的な問題を感情的な抒情詩に組み込んでいる。こうした詩人スティーヴンソンの実験的な態度はもう少し評価されてもよいであろう。少なくとも、マルチタレントとしての作家スティーヴンソンの全体像や文学史における位置づけを再検討する必要性はあるだろう。

注

- 1 正確には *Poetry: A Child's Garden of Verses, Underwoods, Ballads, Songs of Travel, The Works of Robert Louis Stevenson*. Edinburgh Edition. Vol. XIV (London: Charles Baxter & Sidney Colvin on behalf of Robert Louis Stevenson, 1895) である。
- 2 以上の経緯は主にルイス編纂の *The Collected Poems of Robert Louis Stevenson* の 'Introduction' と 'Textual Notes' に依拠する。
- 3 *Songs of Travel and Other Verses* (London: Chatto & Windus, 1896) に拠る。厳密には「スティーヴンソンが1887年にイングランドを最後に出発した後、様々な場所や時々書かれてきた詩を主に集めたもの」とある。1887年5月に父親が亡くなり故郷エディンバラに滞在した後、スティーヴンソンはまずアメリカに向かう。東海岸にしばらく滞在し、翌年になって西海岸から南太平洋に向けて航海の準備を始めている(辻原 817)。本詩集には東海岸に滞在中に書かれたと考えられる詩も含まれる。さらに当初企画していた *Ballads and Verses* に掲載される予定でいた詩もごく一部含まれている。
- 4 Chatto & Windus 出版の *Songs of Travel and Other Verses* では全44篇である。
- 5 スティーヴンソン一家が購入した屋敷の名前は Villa Vailima と呼ばれた。
- 6 'untented' という語は「探究されていない・調べられていない」という意味であるが、「天幕・テントで覆われていない」の意味もかけられていると考えられる。
- 7 ヴォーン＝ウィリアムズが選んだ9篇の詩は第I、III、IV、VI、IX、XI、XV、XVII、XXIII

の詩である。歌曲の後半には、第 XVII や第 XXIII など詩人が人生や過去を振り返る詩、あるいは言葉と歌が持つ記憶の力を歌った第 XV の詩を持って来るなど、内省的な詩を配置する。前半は青春を生きる若者の経験と感情、後半は人生の孤独や死といったテーマを想起させ、どこかで『美しき水車小屋の娘』や『冬の旅』を彷彿とさせる構成になっていると言える。

- 8 ソーマトロープ (thaumatrope) とはカードや円盤の両面に異なる絵を描き、それを回転させて1つの絵を作り出す仕掛けのおもちゃである。たとえば円盤に小鳥と鳥かごを描き、回転させると鳥がかごの中に見えるように見える。またその発展型として、筒状に1つもしくは複数の絵を何枚も描き、やはり中心を軸に回転させてすきまから覗くと、その絵がアニメーションのように動いて見えるタイプもある。19世紀中産階級の間で流行した。
- 9 晩年のスティーヴンソンは病状の快方と悪化を繰り返していた。この詩には第28番目以降の詩に付されているような明確な場所あるいは日付は記されていないが、ルイス編纂の *The Collected Poems of Robert Louis Stevenson* の 'Textual Notes' によると、詩の第2スタンザまでが先に作られていた。その部分は1888年11月初旬にスティーヴンソンが友人に宛てた手紙に載っているため、おおよそタヒチに到着した頃に作詩が始まったと推定される。スティーヴンソンは9月下旬にタヒチに到着した頃から具合が悪く、10月にタウティラ村で倒れている (辻原 817)。その後年末までタウティラ村にて静養し、その後ホノルルに向かった。また、この詩にいつ第3スタンザが加えられたのは定かではないが、'Textual Notes' によると校正の段階で書き加えられており、亡くなる前の非常に体調が悪化していた頃であると推定される。

引用文献

- Ambrosini, Richard, and Richard Dury. 'Introduction', in *Robert Louis Stevenson, Writer of Boundaries*, ed. by Richard Ambrosini and Richard Dury. Madison: The University of Wisconsin Press, 2006, xiii-xxviii.
- Colley, Ann C. 'Robert Louis Stevenson and the Idea of Recollection', *Victorian Literature and Culture* 25 (1997): 203-223.
- Eigner, Edwin M. *Robert Louis Stevenson and the Romantic Tradition*. Princeton: Princeton University Press, 1966.
- Fielding, Penny. 'Stevenson's Poetry', in *The Edinburgh Companion to Robert Louis Stevenson*, ed. by Penny Fielding. Edinburgh: Edinburgh University Press, 2013, 102-117.
- Lewis, Roger C. 'Introduction', in *The Collected Poems of Robert Louis Stevenson*, ed. by Roger C. Lewis. Edinburgh: Edinburgh University Press, 2003, 1-20.
- Luckhurst, Roger. 'Introduction', in *Strange Case of Dr Jekyll and Mr Hyde and Other Tales*, ed. by Roger Luckhurst. Oxford: Oxford University Press, 2006, vii-xxxii.
- Moretti, Franco. *The Way of the World: The Bildungsroman in European Culture*. London: Verso,

2000.

Stevenson, Robert Louis. *Songs of Travel*, in *The Collected Poems of Robert Louis Stevenson*, ed.

by Roger C. Lewis. Edinburgh: Edinburgh University Press, 2003, 169-201.

—, *Songs of Travel and Other Verses*. London: Chatto & Windus, 1896.

志子田光雄 『英詩理解の基礎知識』 金星堂、1980 年

辻原登編 『スティーヴンソン』 集英社、2016 年

Recollection and Memory in *Songs of Travel*

TAKUMI Mari

The paper studies a posthumous collection of poems written by Robert Louis Stevenson (1850-94), *Songs of Travel*, which was first published one year after he died in 1894. Stevenson is now known as a novelist and an essayist, but he was also productive as a poet. While he stayed in the South Pacific islands, he was eager to publish a new collection of poems from the MSS he brought over from England across the sea. The collection starts with some poems which express the spirit of a young solitary traveller. These styles and mood are somewhat similar to those of the Romantics, but the collection shows different aspects in the later poems, which can be connected with some modernist elements.

This collection of poems is also famous for a song cycle of the same name, which was composed by Ralph Vaughan Williams (1872-1958) at the turn of the century, and the collection is often seen expressing Stevenson's nostalgia and sentimentality. The paper examines how the 'recollection' and 'memory' is represented and idealised in the original poems by carefully analysing several of them, which I select from the first half the collection. Stevenson was an experimental stylist, rather than a sentimentalist, and I argue that he integrates the conventional style into an overall scheme that denies the convention, while introducing the function of 'recollection' and such structural issues into his emotional, lyrical poems.